四

長崎の町に秋雨が降っていた。

細い細い絹糸のような雨だ。

筆峰神仙の駕籠の左右を中川淳庵と坂崎磐音が唐傘を差して従っていた。

南京寺の戦いから三日後、ようやく丸山遊郭でも格式を誇る望海楼を訪ねる夜がきた。

駕籠の棒鼻に吊られた提灯が揺れて、遊客がそぞろ歩き、駕籠が行き交う丸山の遊里を映し出す。

磐音は緊張していた。

もしかしたら、奈緒に会えるかもしれない。

磐音と奈緒は物心ついたときからお互いに、

（奈緒は磐音の嫁になる）

（磐音は奈緒を嫁にする）

と考えてきた。その二人が祝言を明日に控えた夜明け、思いがけなくも友同士の斬り合いに大きく人生を狂わされた。

斬り合った友らは磐音の幼馴染であり、同志であり、一人は奈緒の実兄であり、残る一人は義兄であった。

豊後関前に江戸から帰りついた翌日の夜明け、運命はがらがらと音を立てて壊れ、二人を無情にも引き裂いた。

磐音は四年数か月ぶりに奈緒と再会できるかもしれないのだ。

嬉しさよりも怖さが先に立った。

「望海楼に着きましたばい」

駕籠かきがそう言うと門を潜った。

光が眩しく雨の訪問者たちを迎えた。

神仙の駕籠が玄関先に横付けされた。

「いらっしゃいまし」

女将のおからや番頭の平蔵らが神仙一行を出迎えた。無論その夜の訪問を予約してのことだ。

「世話になりますよ」

神仙の供の格好で淳庵と磐音が三階の座敷に案内された。すでに三人の席が大きな円卓に設えてあった。

窓を開け放てば南蛮船、唐船が見えるという。だが、雨のせいで障子は閉められていた。

三人が座につくと同時に、どっと遊女や幇間や三味線弾きの女たちが座敷に入り込んできた。

古書の『長崎土産』にいわく、

「……長崎にてはちと馳走をせんとおもふ客を申請ては遊女をあまたよぶべし、他所にて座頭かげ間役者など勝手によぶ同前也。亭主に成りてよう用捨するも客になりていかがとおもふもまだ恋にかかはるゆえなり」

長崎では、卓袱料理も遊女も芸事も接待の一つ、楼に上がれば呼ぶ習わしだという。

磐音には卓上に次々と運ばれてきた大鉢や大皿の卓袱料理がなんとも珍しかった。だが、飲み食いに来たわけではない。

神仙は座を軽く一騒ぎさせると

「ちょいと女将と話があると。女子衆も男衆もすまんばってん、ちょいと中座してくれんね」

と遊女ら一座の者を下げさせた。

残ったのは、女将のおからと番頭の平蔵の二人だけだ。

「先生、今日はどげんさっしゃったとですか」

と、前もって相談があると知らされていたおからが姿勢を改めた。

「ああ」

と頷いた神仙は、杯に残っていた酒を飲み干し、

「ここにおられる坂崎どのは豊後のさる藩におられた方でな」

と磐音を紹介した。

おからも平蔵も曖昧に磐音に頭を下げた。

「女将、飾らんで話ばしょうたい。望海楼に新しく売られてきた女のことで来た。こちらではなんという名かは知らんばってん、生まれ在所にあるときは、小林奈緒どのと申された」

おからと平蔵の顔色が変わった。

「女将、奈緒どのがこちらに売られてきたのは間違いなかな」

番頭と顔を見合わせたおからが視線を神仙に戻して、小さく頷いた。

磐音の胸が高鳴った。

「神仙先生、坂崎様は奈緒さんのなにに当たられるとやろうか」

磐音の顔をちらりと見ながらおからが訊いた。

「許婚だ、女将」

「な、なんと言わんしゃったな」

「聞いてのとおりたい、女将」

女将はしばらく沈黙した。

磐音が頭を下げると、

「非礼の段、またの野暮の事、お詫びしたい」

と言い出した。

「坂崎様、事情ば聞きまっしょ」

おからが肚を決めたように言った。

頷いた磐音は、藩名だけは容赦してくれと断った上で、一年余り前、江戸から国許に戻った夜の悲劇から急転した藩騒動を詳しく話した。それしか、奈緒との関わりを理解してもらう術がないと思ったからだ。

話が進むにつれ、おからと平蔵の顔が驚いたり、納得の様子を見せたりと変化した。

「……藩の騒ぎを鎮めることに夢中で奈緒どののことをないがしろにしたは、偏にそれがしの怠慢と咎にございます。遊女にいったん売られた者のもとへ、許婚にございますと顔を出すのも、ものを知らぬにもほどがある、野暮の極みと承知しています。だが、奈緒どのに何の罪もございません。そこで、かように恥を忍んで神仙先生、中川どののお情けに縋った次第にございます」

長い話が終わったとき、座には複雑な感情が飛び交っていた。

およその話を知る神仙にも淳庵にも、奈緒とのことは藩騒動の犠牲になったとだけしか話していなかった。それだけに二人の顔は悲痛さを湛えていた。

「坂崎様、話はようわかりましたたい。それで納得のいくこともある」

おからの言葉に平蔵が相槌を打った。

「ばってん、坂崎さん、もはや、奈緒さんはこの長崎におらんとよ」

「なんと申したか、女将」

神仙が、磐音が口を開くより先に声を張り上げた。

神仙先生、よう聞いてくださいな。私もしっかりと答えまっしょ。それが坂崎様のお心に叶うただ一つの道ですもんな」

おからは呼吸を整え直し、平蔵に書き付けを持ってくるように命じた。

番頭が一座に頭を下げて座敷を出ていった。

「奈緒さんが女衒の季平とに連れられて長崎にやってきたのは、ひと月も前のことでした。これまで季平とは、何度か取引をしたことがございます。女衒としては、目利きで、季平の連れてきた女子衆はだれもが売れっ子になりましてな、うちの稼ぎ頭でございました。ぱってん、今度の奈緒さんは、これまでの女子衆とは比べようもないくらいに違うとった。見目麗しいのもありましたばってん、その上に、教養があって、品がよかった。わたしゃくさ、こりゃ、うちの飯櫃たい、長崎の一の上玉たいと魂消ました」

そこへ平蔵が書き付けの束を持って戻ってきた。

「ほれ、みてみんね。ここにこうしてくさ、女衒の季平に払った金の書き付けがありましょうが」

磐音の目に三百両の数字が飛び込んできた。

その磐音が懐に抱いているのは百五十両にすぎなかった。西国屋次太夫が用意してきた金は、切餅六つだったのだ。

おからが女衒への書き付けを仕舞うと小さく吐息をついた。

「長崎で三百両の身売りなんて初めてのことでございますたい。ばってん、わたしゃ、奈緒さんはそれ以上の玉と考えちょりました。胸の内に計算もござりましたたい」

「女将、阿蘭陀行か」

神仙が複雑な顔で訊いた。

「それも一つの途と思うちょりました。駄目なら、唐人行でも四百や五百の金を直ぐに取り戻せると考えてもおりましたたい」

「船に乗せたか」

神仙が先走って訊いた。

おからが首を振った。

「奈緒さんは遊女に身を落とした以上、だれが駄目、なにがいやとは申しません。ただ、女将様、一人の囲い者になるのだけはお許しくださいと、私に頭を下げられたとですよ」

おからの視線が磐音を見た。

「こうしてくさ、坂崎様から事情ば聞かされてくさ、納得できましたたい。普通の女子は、一人の囲い者になることを望むばってん、奈緒さんはくさ、坂崎様に操を立てはって、どげん泥沼に落ちようと一人の思い者にはならんと決心して長崎に来なはったとやろうね」

膝に置かれた磐音の拳がぶるぶると震えた。

「わたしゃ、奈緒さんの心持ちにも打たれました。それならそれでうちで気長に稼ぎ頭に育て上げ、大名屋敷の長崎掛屋ら江戸、京の出店のお客様相手の遊女にと考え直したのだ、半月も前のことやったやろうか」

平蔵が相槌を打った。

「そんな折りのことやった。豊前小倉の岩田屋善兵衛が長崎に見えられましてな、まだ座敷にも出ていなかった奈緒さんを見られて、一目で気に入られたとですよ」

「岩田屋とは何者か」

「神仙先生も知らんね。西国筋では老舗として知られた妓楼の旦那たいね。長崎の丸山でも岩田屋さんの世話ならん宿主はもぐりの者たい。ともかくくさ、すまぬが手垢のつかぬうちに譲ってくれ、小倉城下に新しく設ける遊女屋の花形太夫にしてみせるの一点張りで、三日三晩、膝詰め談判でくさ、とうとう根負けして、うちでは、奈緒さんを豊前小倉に五百両を置いて行かれて、あとの半金は為替を送るという話やったが、番頭さん」

と番頭に視線を向けた。

「まだ小倉から振込みはございません」

「岩田の旦那のこと、間違いはなかろうが……」

と呟く声も磐音には耳に入らなかった。

「なんという話か」

神仙が憮然とした顔で呻いた。

「神仙先生、こげな話があるなら、うちでもなんとか置いとこうたい。ばってんなんもしらんもんでくさ、こげんに間の悪か話になったたいね」

おからは気の毒そうに磐音に言った。

「女将、奈緒どのが世話になりました、礼を申します」

気を取り直した磐音に頭を下げられたおからが慌てて、

「坂崎様、奈緒さんならどこに行かれてんくさ、泥沼に落ちることはなかろう。京の島原でん、江戸の吉原でんくさ、花魁、太夫と称される遊女に出世されますばい。長いこと遊女ば見てきたわたしがくさ、保証しますたい」

と言った。

そのとき、ふいに廊下を隔てる襖が開いた。

「おや、あんにょう、なんちゅう無作法ね」

おからが廊下に座った遊女に厳しく言った。

唐人相手に馴染みのある傾城を長崎ではあんにょうと呼んだ。

「女将様、非礼は承知にございます。廊下を通りかかり、つい話を聞いてしまいました。お叱りはあとで女将様からなんなりと受けます。今はしばしの間、坂崎様を私の部屋にお連れしてようございますか」

「あんにょうは奈緒さんと親しげやったね」

と納得した女将が磐音を見た。

磐音は事情が分からないながらも、奈緒の面影の断片なりがあればと遊女に従った。

細面の遊女の部屋は、十二畳と続き部屋だった。

女は磐音を火鉢の前に座らせた。

「坂崎様、奈緒様とは、短い間でしたが親しくさせていただきました。私にとって心楽しい時期にございました、今ではそれが切ない思い出に変わってしまいました。神仙先生がお武家様を連れてこられたと聞き、なぜか頭に閃いたのでございます。このお方はひょうっとしたら、奈緒様と関わりのある方ではないかと……それでつい廊下で立ち聞きいたしました」

「そうでしたか。奈緒どのと親しくしていただいた朋輩がこうしておられたとは」

と遊女の行動を理解した磐音は、

「奈緒どのは国表のことをなにか話ましたか」

女は細い顔を横に振った。するとほっそりした首筋の筋肉がなまめかしく動いた。

「奈緒様はなにも語ろうとはなさいませんでした。が、なにか心に残ることは私にも察しがつきました。見てくださいな。坂崎様を呼びした理由にございます」

床の間に白扇がかかっていた。

夕暮れの陽光に黄金色に染まった泉水の岸辺に幼い男女が立って、そよ吹く風の中、無心に泳ぐ番いの鴛鴦を見ていた。

磐音はすぐに絵を描いた主が奈緒と分かった。

絵の中の幼い男女は、磐音と奈緒だった。絵には、

鴛鴦や　過ぎ去りし日に　　何思ふ

と奈緒の字で添えられてあった。

「坂崎様、奈緒様を偲ぶただ一つのものにございます。ですが、これは私よりもあなた様にふさわしき画文にございましょう」

遊女は床の間から白扇を外す、ゆっくりと閉じて磐音に差し出した。

細雨は篠突く雨に変わっていた。

神仙が駕籠に乗り、淳庵と磐音が従って丸山の望海楼を出た。

雨をついてしゃぎりの調べが聞こえていた。

駕籠は走った。

磐音も哀しみを胸に抱いて走った。

が、直ぐに駕籠が辻の真ん中で停止した。

同時に淳庵がわっと叫ぶと、唐傘を捨てて雨の路上に転がった。

「中川さん！」

磐音も傘を投げて反射的に淳庵の名を叫びながら、淳庵のもとに飛んだ。すると淳庵が左腕を抱えて倒れ、丸笠の五人が駕籠を囲んでいた。

日田代官領の峠で淳庵を一度襲ったことのある裏本願寺別院奇徳寺僧都の岸流不忍坊と、東角、西丸、南千、北面の五人の刺客たちだ。

今宵は、不忍坊が薙刀を、残りの四人が直刀を構えていた。

「大事はない」

自ら腕の傷を調べていた淳庵が叫んだ。差していた傘がぱっかりと斬り割られているところを見ると、傘が間合いを狂わせたとみえる。

磐音がすっくと立ち上がった。

「一度ならず二度までも、学問に邁進する徒を亡き者にせんとするそなたらの横暴許し難し。今宵のそれがしは、ちと腹に怒りを抱えておる。その覚悟で参られよ！」

磐音の叫びが秋雨の丸山町の木霊した。

「日田の峠では思わぬ不覚をとったが、今宵はそうはいかぬ」

不忍坊は喚くように言うと、立てていた薙刀の刃を磐音に向けた。

駕籠の棒鼻に吊るされた提灯の明かりが反りの強い薙刀の刃を光らせた。

「中川さん、神仙先生の駕籠のかたわらから動いてはなりません」

磐音がそう言うと備前包平を雨中に抜いた。

真ん中に不忍坊をおいて、左右から二人ずつ鳥が羽根を広げたように磐音を囲んだ。

この夜、磐音は宣告どおりに憤怒に塗れて包平を地擦りに置いた。

憤怒は、奈緒を苦界に沈めた自らの考えの至らなさに発していた。さらには、無知ゆえに淳庵の命を狙う不忍坊らの行動が増幅させてもいた。

「死ね！」

左翼の東角の直刀が雨を弾き斬るように磐音の体を襲った。

磐音は同時に右翼に走っていた。

南千、北面の直刀が慌てて磐音に振り下ろされた。

腰を沈めて走った磐音の包平が地擦りから虚空へと刎ね伸びたとき、二人の直刀はまだ振り下ろされる過程にあった。

包平の豪剣が南千の足から腰を、さらに北面の腰から胸を斬り上げて、丸笠の縁を、

ばっさり

と割った。悲鳴を上げて、

どさりどさり

と濡れそぼった道に倒れたとき、磐音は包平を虚空で反転させつつ、不忍坊の薙刀の攻撃の正面に入り込んでいた。

だが、不忍坊の動きは迅速を極めた。

鋭く振り下ろされた薙刀が磐音の眉間を襲う。

白く大きな刃風が磐音に迫る。

磐音がなしえたことは、籐を固く巻き込み、漆で塗り固めた薙刀の千段巻をかろうじて弾くことだった。

両者は肩をぶつけ合って擦れ違った。

不忍坊は弾かれた長柄の薙刀を胸先に引き付けて、再び振り上げながら反転した。

磐音は包平を八双に構えつつ向き直った。

二人は一間半の間合いで睨み合い、即座に攻撃を仕掛け合った。

再び反りの強い薙刀の刃が懸河の勢いで磐音の面上を襲い、磐音の八双の剣は、間仕切りを切って生死の境に踏み込みつつ、肩口に落とされた。

薙刀と剣。

相手の内懐に入り込んだ磐音の包平が一瞬早く不忍坊の肩を深々と斬撃していた。

げええっ

不忍坊が砕け散るように転がった。

一瞬の裡に三人が丸山遊郭の雨の辻に倒れていた。

修羅の形相の磐音が残る二人に向き直ったとき、東角と西丸は、

「うわわわっ」

と錯乱の悲鳴を上げて、後退りしながら逃げ出していた。

駕籠の中から筆峰神仙が姿を見せて、呆然とその場の様子を見回した。

「そ、そなたは……」

「なにもおっしゃいますな、神仙先生」

磐音は秋雨にゆっくりと包平を振って血を振り流し、鞘に収めた。